2021年4月1日神戸大学附属図書館学生チームULiCS https://lib.kobe-u.ac.jp/about/ulics/

2021.4 vol.9

# 厳選「うりくす文庫」展示中!

ULiCSメンバーが、選りすぐりの本を紹介する「**うりくす文庫**」の展示を、総合・国際文化学図書館のカウンター近くのコーナーで行っている。担当者が自由に設定したさまざまなテーマで選書し、棚のレイアウトからポップまで全てが各選者のオリジナルとなっている。それぞれの個性とセンスがあふれたこちらの展示本は借りることもできるので、興味が湧いた本があればぜひ手に取ってみてほしい。本があなたをまだ見ぬ世界に連れて行ってくれることだろう。うりくす文庫があなたに新しい世界を拓くきっかけを与えられたらとてもうれしく思う。今号の1,2面では、うりくす文庫の展示を担当したULiCSメンバーが、テーマや本を選んだ理由、それについての紹介や隠された思いなどをそれぞれの文章で紹介している。選出の背景にある考

えもら展気をていてがにて新にないないないないないである。





# うりくす文庫選者によるコーナー紹介

# 新しい世界へ



大学生の間に留学や海外旅行を予定していた方も多いのではないでしょうか。残念ながらそれは難しくなってしまいましたが、本を通じて世界を広げることはできます。

私は「新しい世界」をテーマに9冊の本を選びました。自分の世界を広げるのに最適なのが言語。独学で外国語を学ぶのにはニューエクスプレスシリーズがぴったりです。今回はウクライナ語を選びましたが、みなさんもぜひ興味のある言語のテキストを手に取ってみてください。そしてウクライナを舞台にした小説『ペンギンの憂鬱』『大統領の最後の恋』(アンドレイ・クルコフ)もおすすめです。ストーリーが魅力的なのもさることながら、ウクライナの生活の描写を楽しむことができます。過去の人々の生活について知るには、インタビュー集も役立ちます。『モスクワの女たち』(カローラ・ハンソン、カリン・リーデン)ではソ連時代の女性が労働、家事、育児といった日々をどのようにすごしていたかを知ることができます。『夫婦で行くバルカンの国々』(清水義範)といった各国の歴史と文化にふれられる旅行記もきっと新しい学びをもたらしてくれるはず。

読んでいるうちにどんどんひきこまれるような本たちを選んだので、一度本棚を見ていただけるとうれしいです。あなたにとっての「新しい世界」が図書館から見つけられますように。 (文学部4年 岸本)

温息

演劇

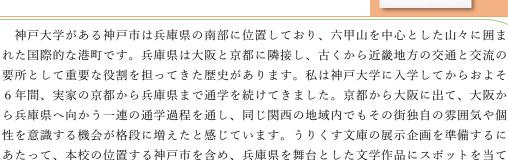
読む

ジー兵庫県と立

私の担当箇所では「演劇」というテーマで本を選んでいます。コロナ禍の今、実際劇場に足を運んで生の演劇を観ることから離れてしまっている人もいるでしょうし、そもそも観にいくことすら経験したことがない人もいるかもしれません。そんな演劇を「観る」ことではなく、「読む」ことに焦点をあてたのが今回の選書です。たとえば平田オリザの『幕が上がる』は高校の演劇部が大会を目指し切磋琢磨するのを描いている作品で、恩田

陸の『チョコレートコスモス』はとある舞台演劇に向けたオーディションに集められた女優たちによって繰り広げられる物語です。視覚的な演劇が紙の上で再現されています。役者が演じている様子を表現した作者の紡ぐ言葉たちをぜひ味わっていただきたいです。

反対に、すでに幾度かの観劇経験があるような人向けに選んだ本が、シェイクスピアをはじめとした国内外の劇作家が書いた戯曲たちです。寺山修司の作品は私たち現代人にとって読みやすい言葉で書かれているので、特にとっつきやすいと思います。戯曲は主に台詞が並んでいるため、場の状況などに触れられた表現はほとんどないです。そんな文章を読めば頭の中で想像が膨らんできませんか。キャスティングもセットも自分だけのオリジナル脳内演劇を作り上げてみるのはいかかでしょうか。 (文学部2年 伊藤)



1000年以上の歴史をもつ代表的古典文学の『**源氏物語**』、神戸独特の異国文化を投影した『**花の降る午後**』、城崎温泉での湯治を通じて自身の在り方について向き合う心境小説『城の崎にて』等、あえて執筆の年代、ジャンルを問わずに多種多様な作品を取り上げました。意外と知られていない兵庫県の魅力発見の機会にしてほしいと思います。

神戸大学に入学した人の中には県外出身の方も多数いるでしょう。もともと兵庫県にゆかりがなかった人でもこの大学に通うことで兵庫県と何らかの縁ができたことを誇らしく思ってほしいです。そして大学での学びや交流を通じてこの地の強みや地域観を共有することができるのであれば大変嬉しく思います。 (農学研究科修士2年 上村)



私のコーナーでは、「手紙」が鍵になっている本を4冊選んでご紹介しています。主人公たちが偶然逃げ込んだ廃屋での不思議な手紙のやりとりを描いた『ナミヤ雑貨店の奇蹟』(東野圭吾)では、手紙のやり取りを通して成長していく登場人物たちの姿に勇気づけられます。大学院生・守田一郎と彼の親しい人々とのやり取りを描いた書簡体小説『恋文の技術』(森見登美彦)は、読んでいて肩の力が抜けるようなコミカルな作品。鎌倉で代書屋を営んでいる主人公のもとに舞い込む風変わりな依頼と、彼女のほのぼのとした日常を描いた『ツバキ文具店』(小川糸)では、何気なくも温かい人と人との繋がりに心がほぐれます。そして国語の教科書でお馴染みの『おてがみ』(アーノルド・ローベル)を収録した『Frog and Toad Are Friends』では、洋書ならではのユーモアたっぷりの文章が楽しめて、読んでいて温かく幸せな気持ちになります。4冊とも、手紙っていいなと思えるようなものを選びました。

最後に手紙を書いたのはいつですか?私自身も筆不精なのですが、それでも相手のことを考えながら手紙を書く穏やかな時間が大好きです。手書きの文字には、メールやLINEにはない温かさがあると思います。会いたい人にもなかなか会えない日が続いている今、たまには手紙で想いを届けてみませんか。 (医学部3年 内田)





気になる本が見つかったらぜひ図書館へ! お待ちしています

# 書評



「究極の愛」とは、こんなに後味の残るものなのだろうか。自分のせいで動物園に入れられたヒグマを必ず救い出すと決めた小学生の雨子は、飼育員をめざす。雨子はそう決めてからずっと、一途にそのヒグマだけを想いつづける。そしてそれゆえに、両親のあたたかさが苦しい。親友とすれ違う。いろんなことに疑問を感じる。どうして助けるのは人間だけなのか、動物が困っていても助けないのか。誰もが口にしたかった純粋な問いは、彼女の口からこぼれ出る。

最も印象的なのは、動物のことを「そんなこと」という肉親に雨子が絶望するシーン。両親は、雨子の「考えすぎ」な想いを窘めこそすれ、激しく糾弾することはなかった。しかし、雨子が素直に謝ったことを引き金に、親の素直な気持ちは彼女を踏みにじるのだ。自分は雨子ともに絶望しているのか、それとも雨子を絶望させているのか。読んでいるうちに、だんだんわからなくなる。雨子のようなことを考える頭をもちながら、雨子の両親とおなじことを言う口をもっている。雨子とまわりの大人と自分は、いつしか墨流しのようにうねり、混じり、ひとつの模様になって、そこにはじめのほうに読んだ言葉が突き刺さる。「みんな半分だ」。わたしも半分だ、と思うのは思い込みだろうか。

作中にでてくる素直でまっすぐないくつもの想いが、すべてねじれの位置にあるようにわたしは感じた。それぞれにはそれぞれの「正しさ」があり、その「正しさ」も思い込んでいるだけかもしれない。ならば、大人になった雨子の決断につい正誤の判断をしようとする自分は、どう扱うべきだろう。この本の帯には、こう書いていた。「真っ直ぐに誰かを想う気持ちが交差する、切なく温かな物語」。この物語がもつ温度は、読み手に託されている。 (国際人間科学部1年 うみゅうし)

古典は 古典は 古典は 本当に必要なのか、 伝説のシンポジウムの表面を表示して 古典不要論を考える際の基本図書を 古典不要論を考える際の基本図書を 古典不要論を考える際の基本図書を

今年神戸大学に入学された新入生の方は入試の出題形式変更と新型コロナウイルスに振り回されてさぞかし大変だったと思う。本当にお疲れさまでした!

文学通

2

1

さて、神大入試では古文漢文が必要なので皆さんも勉強したことだろう。が、勉強するなかで「こんなん勉強して将来の役に立つ?」と思った人も多かったはず。この本は、その疑問を解決……してはくれないが、答えを見つける手助けくらいはしてくれる。

そもそも私がこの本を読もうと思ったきっかけは、来年度から高校古典の学習時間が減ると聞いたことだ。私自身文学部出身ということもあり古典は好きなほうなので、感情面では古典をやらなくなるのは寂しい。しかし、理性ではまぁ仕方ないかという気もする。感情と理性、どちらの立場をとるのか決めたくてこの本を手にした。

実際読んでみると、この本に出てくる古典必要派(古典の研究者や中高の国語教員)の主張はあまりにもよっとしており感情的すぎる。一方、古典不要派は理系研究者とビジネスマンなので、とにかく理詰めで攻めてくる。その上「古典教育を完全になくすわけではなく、現代語訳を読んでよしとするなど学習優先順位を下げるべき」といった妥協案も提示してくるため、納得せざるを得ない。というか、古典必要派の論点がずれすぎており「やっぱり高校では古典を削ってディベート教育をしたほうがいいな……」と逆に痛感させられた。というわけで、読後の私は古典必要派への同情を排して古典不要派となった。このように感情と理性を切り分けて判断することは研究でも仕事でも必須スキルなので、ぜひ皆さんも大学生活で身につけてほしい。

ちなみに、この本は学生さんのリクエストを受けて神 大図書館で購入したもの。リクエストは神大生ならだれ でもできるので、図書館に置いてほしい本があればお気 軽にどうぞ。 (職員 山本)

# ~新入生へ向けて~ ULiCSとは?





メンバー募集中



ULiCS(うりくす)とは、神戸大学附属図書館の学生サポーターチームです。学生と教職員が一緒になって意見を出し合ったり活動を行ったりして、大学をより良いものにしていこうという「学生協働」の取組が神戸大学も含めて全国の大学で行われており、神大附属図書館におけるチームとして結成されました。メンバーは学生と図書館職員で構成されています。学生メンバーは男女・学部・年次も様々。院生の方も在籍しています。活動費は原則「無料」。普段の活動は月1の定例会(現在はZOOMで)と、+α企画の準備・運営など。兼部ももちろんOK!(筆者も兼部しています)。学生目線で、図書館をもっと使いやすく、親しみやすくしていくことを目標として活動しているので、魅力的な図書館づくりに携わりたい方にはピッタリです。

ここからは、主な季節のイベント (コロナ禍前) を紹介していきます。

# 【春】

• 新歓…チラシ配布・説明会の実施に加えて、一昨年はお花見をしました。

# 【夏】

- **大学図書館学生協働交流シンポジウム**…全国の大学図書館チームが集まり、活動内容を発表したり、 交流したりします。新たな活動のヒントが得られる機会になっています。
- **下賀茂納涼古本祭り**…京都への遠足イベント。ちなみに 2 年連続で行けていませんORZ (豪雨/'19 年、コロナ禍/'20年)。

## 【不定期】

- **ビブリオバトル**…オススメしたい本について5分でプレゼンし、聴衆に「読みたい!」と思った本に投票してもらう「知的書評合戦」。これまで2回開催しました。
- まごまご読書倶楽部…テーマに沿った本を持ち寄り、まごまごと話し合う読書会。
- The ULiCS TIMESの発行…今あなたが読んでいる団体紙です。年に数回ほど発行し、イベントリポートや書評、図書館サービスの効果的な使い方案内を載せています。職員さんによる「うりコミ」は必見!
- **うりくす文庫**…総合・国際文化学図書館での展示。メンバーおすすめの本を並べたり、ポップで 彩ったりします。
- **グッズ制作**…図書館のマスコットキャラクター「うりこ」を使った、グッズの制作。過去にはクリアファイル、缶バッジ、付箋など。可愛いと好評のLINEスタンプも2種類販売中。

ULiCSは、通年で新規加入を受け付けていますし、年次が上がってから加入される方もいます。落ち着いてからでも構いません。いつでも応募フォーム(https://lib.kobe-u.ac.jp/libraries/10292/)やTwitterのDM(@ULiCS\_KobeU\_Lib)から相談を受け付けています。私たちと一緒に、神大附属と図書館を良いものにしていきませんか?